

特集 「周術期麻酔管理の社会課題」

巻 頭 言

京都府立医科大学附属病院
病院長

佐 和 貞 治



この度、周術期の麻酔管理が抱える社会的な課題への取り組みに関する特集を立案させていただきました。私は2010年7月着任より2023年度末に退任いたすまでの13年間弱に渡り、京都府立医科大学麻酔科学教室を三代目教授として運営管理させていただきました。その間、先代教授らの築かれた麻酔・集中治療・疼痛緩和に関わる有能なヒューマン・リソースを引き継がせていただき、たいへん助けていただきました。

また、教室スタッフには、この領域の社会課題に取り組む次世代を担う有能な人材として、京都府立医科大学麻酔科学教室発全国区で大きく活躍して頂ける舞台に後押ししていくことに責務を感じて教室運営に携わって参りました。そこで、この度、京都府内外で活躍の京都府立医科大学麻酔科学教室ご出身の教授陣にお願いいたし、それぞれが現在取り組まれておられる周術期麻酔管理に関わる社会課題について、概説頂きました。周術期・麻酔管理においては、手術室内外に増加する麻酔管理の需要に対して、相対的な麻酔科医師のマンパワー不足とそれを補うコメディカルによるタスクシェアが大きな課題となっています。そして、2024年度から開始の医師の働き方改革に関わる諸問題への取り組みが急務となっています。また進行する高齢化社会の中で、高度な麻酔管理や、速やかな術後の回復が周術期管理に求められています。

更には、国際社会における医療人育成に関わる国際貢献に関する日本の立ち位置も問われるところですが、これらの重要課題に取り組まれる京都府立医科大学麻酔科学教室出身で、私の1年先輩の重見研司教授（福井大学器官制御医学講座麻酔・蘇生学領域）には「自動麻酔の夜明け」、私の教室の後輩の4名の教授陣、廣瀬宗孝教授（兵庫医科大学麻酔科学・疼痛制御科学講座）には「医師の働き方改革」が及ぼす周術期麻酔管理の変化」、中嶋康文教授（近畿大学麻酔科学講座）には「非心臓手術における合併心疾患の評価と管理に関するガイドライン2022年改訂とそれに伴う臨床麻酔の課題について」、志馬伸朗教授（広島大学救急集中治療医学）には「集中治療と周術期管理」、天谷文昌教授（京都府立医科大学疼痛・緩和医療学教室）には「術後疼痛管理チーム」について執筆をお願いし、また私自身の持つ「外国人臨床修練医制度」に関する課題を加え、合計6つの重要な周術期麻酔管理に関わる社会課題についての特集を組ませていただきました。本誌特集が麻酔管理の関わる社会課題の解決の一助となることを願っています。

また、京都府立医科大学麻酔科学の故宮崎正夫初代教授、田中義文二代目教授から教室を引き継いだものとして、私を含めた同教室出身の後進の活躍についてのご報告とさせていただきます。

